

ローベルト・ムージル年譜

— 『特性のない男』に重心を置いて —

MoE = 『特性のない男』

- 年（歳）
- 1880 11月6日、ローベルト（アドラー・フォン）ムージルは、オーストリアのクラゲンフルトに生まれる。ただ一人の姉は早世。父アルフレートはグラーツ工大で機械工学を学び、同大の助手となり、その後ブリュンとクラゲンフルトで技師、コモタウとシュタイルの専門学校の校長となる。
- 1881（1） 一家はボヘミアのコモタウへ引っ越す。『トンカ』のヒアツィント小父のモデルとなるハインリヒ・ライターと両親との親密な長い付き合いの始まり。1882年、一家はシュタイルへ引っ越す。
- 1886（6） シュタイルの小学校に入学。幼稚園から幼い少女を誘惑（「私の5歳から10歳の間」）。1889年（9歳）には7か月にわたり神経と脳の大病を患う。
- 1890（10） シュタイルの実科ギムナジウムに入学。父アルフレート、ブリュン国立工科大学の正教授となる。
- 1891（11） 3月、ブリュンへ引っ越し、同地の州立実科ギムナジウムに転校。宗教問題に関心を寄せる。母ヘルミーネと上述のライターとの関係で悩む（これが喜劇『フィンツェンツ』を書く動機になったといわれ、また小説『トンカ』にもこの間の事情が見出される）。MoEのヴァルターのモデルとなるグスタフ・ドーナト（＝グストゥル）との友情の始まり。
- 1892（12） 九月、家庭での教育困難のためにアイゼンシュタットの陸軍幼年学校へ転校。はげしいホームシック。
- 1894（14） 9月、モラビアのヴァイスキルヒェン陸軍士官学校に入学。下士官教育。数年前に詩人R・M・リルケが懊悩多き日々を過ごした学校。この時代が『テルレス』の素材となる。
- 1897（17） 9月、ウィーンの陸軍工科大学に入学。弾道学へ関心。12月、父の提案で軍人志望の道を捨てる。
- 1898（18） 父が学部長になっているブリュン工大の機械工学科の正聴講生

- になる。ニーチェを読み始める。初期の詩作。劇作の試み（1901年まで）。
- 1899 (19) 自伝小説『生体解剖氏』(monsieur le vivisecteur) に手をそめる。アリストテレスの詩学、たぶんこの頃にノヴァーリス、ドストエフスキー、エマソン、メーテルリンクを読む。たぶんこの頃に若い女優へ強烈な恋心を抱き、彼の感情は「生まれて初めて金で刺繍されている緋色のマントを着る」。その後日記のなかで、この体験は「ヴァレリー体験」という客観的な名称を与えられ、彼の魂の研究課題となる。オーストリアの詩人シャウカール、アルテンベルクなどの影響を受ける。11月、1回目の技師資格のための国家試験に合格。
- 1900 (20) 『パラフラーゼン』(Paraphrasen) を書く（1901年まで）。ブリュンの若い作家カルル・ハンス・シュトゥローブル、フランツ・シャマンなどと最初の文学的な接触。
- 1901 (21) 初めてカントを読む。3月、ブリュンの作家たちによる公開朗読会。ミュージルは自作の『パラフラーゼン』の一部を朗読。4月、ブリュンの慈善祭で「フェンシング上演」に参加。のちに『トンカ』の女主人公となるヘルマ・ディーツと、これより5年間の交情。梅毒にかかる。7月、2回目の技師資格の国家試験に合格。10月、ブリュンで一年志願兵（1902年9月末日まで）。この頃の日記の記述がMoEの第2巻第10章で生かされている。
- 1902 (22) 5月、エルンスト・マッハの「通俗科学講義」を読む。たぶんこの年に『テルレス』の創作開始。10月、父の勧めで不満ながらシュトゥットガルト工大の工学実験室と材料試験所の無給助手となる（1903年4月までと、同年5月から10月まで）。ここでの経験はMoEの第1巻第10章で生かされていると思われる。哲学に熱中。
- 1903 (23) 1月、予備陸軍少尉。4～5月、軍事演習。8月、『テルレス』の仕事に熱中。ドイツの古典と19世紀文学を読む。10月にはベルリン在。同地の大学でカルル・シュトゥムプ教授のもとで哲学と心理学研究。たぶんヘルマ・ディーツもローベルトとベルリンへ赴く。『テルレス』の仕事続行。
- 1904 (24) エドゥモント・フッセルルの「論理学論文集」、ほぼ同じ頃にメーテルリンクの「貧者の宝」を読む。2月、雑誌「自然と文

- 化」に「小企業の原動力」を掲載。6月、遅ればせの大学入学資格試験を受けて合格。夏学期以降グスタフ・ヨハネス・アレッシュと親しくなる。12月、「自然と文化」誌に「居間の暖房」を掲載。
- 1905 (25) 友人のグスタフ・ドーナトの婚約者アリーセ・シャルルマン (MoE のクラリセのモデル) と知りあう。たぶんこの頃、日記に『小説の下準備』という題名の草案。クラリセという名前がすでにみられ、のちのヴァルターのためのいくつかの性格づけがみられる。4月、ユイスマンス、ヤコブセンを読む。ヤコブセンの「マリエ・グルッペ夫人」、「ニールス・リーネ」。5月、ノヴァーリスの「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」を読む。6月、深い感動を覚えながらエレン・ケイの「生活術による魂の開花」を読み、その後日記にその抜粋を記入。トマス・マンの「ブッテンブロック家」を批判。7月、エマソンのエッセイ、ヤーコブ・ブルクハルトの「イタリア・ルネッサンスの文化」を読む。
- 1906 (26) ほぼこの頃から、エルンスト・マッハに関する卒業論文の制作にかかる。この年または次の年に友人のアレッシュのためにミュージル式「色彩回転器」を発明。『テルレス』の校正刷りに激しく手を加え、10月、処女作『テルレス』(Die Verwirrungen des Zöglings/ Törleβ) をウィーン書房から刊行。12月、アルフレート・ケルはベルリンの「デア・ターク」紙に、「ローベルト・ミュージルは世に残るべき一冊の本を書いた」と激賞。その他多くの賛辞を得る。
- 1907 (27) ベルリン在。将来彼の妻となるマルタ・ハイマン夫人が日記の記載に登場、すでに夏には彼女を「花嫁」と呼んでいる。
- 1908 (28) 3月、卒業論文『E・マッハの学説の評価のために』(Beitrag zur Beurteilung der Lehren Machs) により哲学博士の学位取得。大学教授となる機会を放棄し自由な作家の道を目指す。フランツ・プライらの主宰する雑誌「ヒュペリオン」に短編『魔法にかけられた家』(Das verzauberte Haus) を書き、さらに次の短編を依頼される。
- 1909 (29) 1月、グラーツ大学のマイノング哲学教授から助手としての招牌を受けるが断わる。ルートヴィヒ・クラージェス(MoEのマイン

ガストのモデル)と知りあう。

- 1910 (30) 上記依頼の短編、2年後の今も仕上がらずに苦渋している。9月よりマルタとイタリアに滞留。友人のアレシユに「われわれは——つまり私と私の既婚の姉のハイマン夫人とはリドにいる」と書く。父のたつての勧めで定職を得るためにウィーンに戻る。
- 1911 (31) 3月、父の口添えでウィーン工科大学図書館試補となる。4月15日、ウィーンでマルタと結婚。(因にマルタについて触れれば、1874年ベルリンで生まれ、21歳で若い画家と結婚。2年後画家はフィレンツェで死亡。女流画家のマルタはそのままイタリアに留まり1898年イタリア人商人とローマで再婚。二児をもうけるが、1903年には二児を携えて夫のもとを去り、ベルリンの姉のもとに身を寄せ、ここでローベルトと知り合う)。すぐさま図書館勤務をつらがり創作活動のできないことを嘆く。休暇をとり、1905年に彼の日記のなかで考えた自伝小説(のちの『特性のない男』の最初の段階と見なすこともできるもの)を再考する。苦心さんたんのすえに書き上げた短編を6月、ミュンヘンのミュラー社から刊行。『結合』(Vereinigungen)という表題で、『愛の完成』(Die Vollendung der Liebe)と『静かなヴェロニカの誘惑』(Die Versuchung der stillen Veronika)の2編をおさめる。この短編に対して悪評相次ぐ。ムージルは文学的な伝統に固執してなされるこれらの批判に対して、「われわれはゲーテ、ヘッペル、ヘルダーリンではなく、マッハ、ローレンツ、アインシュタイン、ミンコースキーから学ぶのだ」と日記に記す。6月14日～7月11日、ブリュンで軍事演習。10月、トルストイの「アンナ・カレーニナ」を読む。12月13日、ニーチェの「この人を見よ」を読み、日記に「アリーセ(＝クラリセ)と並行して」と指示。12月16日、上記図書館の正式の分類係員になる。ここでの経験は『特性のない男』の第1巻第100章で活用されていると思われる。
- 1913 (33) F・ブライ主宰の雑誌「デア・ローゼ・フォーゲル」にエッセイ「ローベルト・ムージルの著書について」、「道徳の実り豊かさ」、「数学的人間」を掲載。長い休暇をとりローマに滞在、当地の精神病院を訪れる。『特性のない男』の第2巻第33章でそこでの体験が物語られている。

- 1914 (34) 1月、ラーテナウ(MoEのアルンハイムのモデル)と会見し、親しげに肩に手をかけられる。図書館員の仕事をやめ、2月、ベルリンのザムエル・フィッシャー社の「ディ・ノイエ・ルントシャウ」誌の編集員となる。3月、リルケと知りあう。4月、上記の雑誌に「形而上学のための覚書」(ラーテナウ著「精神の力学」について)を掲載。8月1日、第1次世界大戦勃発。同20日、国民軍(もと兵役経験者)大隊の陸軍少尉に任命され、9月には同大隊は南チロルに向かう。11月、陸軍中尉に昇進。
- 1915 (35) 5月、イタリア参戦と同時にイタリア北部山岳地方に転ずる。のちの小説『黒つぐみ』、『グリージャ』、『ポルトガルの女』の素材となるべきいくつかの体験をする。
- 1916 (36) 青銅の従軍十字勲章を受ける。3月、雪崩に遭い、「身の危険を顧みずに救助作業に加わり」、そのため口内炎、歯肉炎、咽頭炎などを患い、治療のために後方の病院へ回され、4月にはプラハの病院へ。4月14日、カフカを訪問。4月20日、ムージルは差し当たり前線勤務が無理なのでポーツェンの軍集団司令官オイゲン大公のところへ派遣される。7月、ポーツェンの「チロル兵隊新聞」の編集員となり、10月以降その責任者となる。
- 1917 (37) 3月、フランツ・ヨーゼフの騎士十字勲章を受ける。4月、上記新聞が発行停止になった後、スロヴェニアでの軍の指揮のために配置替え。10月、父アルフレート世襲貴族に列せられ、ムージルも貴族の称号(エドラー・フォン・ムージル)を受ける。11月、陸軍大尉に。
- 1918 (38) 1月、父アルフレート、貴族の紋章を授かる。3月よりウィーンにある戦時新聞局編集部に配属され、終戦を迎える。MoEの前々々身に当たる『スパイ』(Der Spion)にとりかかる。『スパイ』の主人公名はアキレス。
- 1919 (39) 初め頃、H・S・チェンバリンの「一九世紀の基礎」、トマス・マンの「非政治的人間の考察」、ベネディクト・クロウチェの「美学」を読む。1月より外務省新聞局記録室に勤務(翌年の四月まで)。ここでの経験は『特性のない男』の第1巻第52章で生かされていると思われる。12月、トマス・マンと最初の出会。

- 1920 (40) 9月、陸軍省に勤務(1922年12月まで)。いわば軍人と市民精神との橋渡し役。ここでの官僚、政党人、軍人などとの困難の多い接触から、MoEの第1巻の「平行運動」を織りなす諸人物が醸成される。
- 1921 (41) ゲオルク・キルシュエンシュタイナー (MoEのハーガウアーのモデル)の「自然科学教育の本質と価値」、F・W・フェルスター (MoEのリンダナーのモデル)の「生き方」を読む。陸軍省の部局長、上級軍人らに対して精神工学や心理学などに関する講演を数回おこない、彼らに斬新の気風を送る。3月より「ブラハ」新聞の美術、演劇欄を担当(翌年の8月まで)。この報酬よく、11月にはウィーンのラフモフスキー街20番地に、創作活動のためにぜひ必要と思っていた持ち家を購入(この家に以後17年間住むことになる)。11月の手紙で、公務員の仕事と批評家の仕事のために小説の仕事が早く進められないと嘆く。戯曲『夢想家たち』(Die Schwärmer)を発表するも不評。12月、「デア・ノイエ・メルクル」誌に小説『グリージャ』(Gri-gia)を発表、早ければこの年、K・ギルゲルゾーンの論文「宗教体験の精神的構造。実験に基づく宗教心理学研究」を読み、書中で使われているM・ブーバーの「恍惚的告白」から抜粋。
- 1922 (42) 6月、詩人オスカー・レールケ日記に記す——「ムージルと会う。気持がよく、賢く、暖かで、この世を公正に把握する人がときにいることを知る喜び」。8月、「ブラハ」新聞より「ボヘミア」新聞に移り、翌年12月までウィーン劇場の批評を担当。1918~20年のあいだ手掛けていたMoEの前々身の『スパイ』から前々身に当たる『救済者』(Der Erlöser)に移り、1924年ごろまで続ける。『救済者』の主人公名はアンダース。「デア・ノイエ・ロマン」誌に小説『トンカ』(Tonka)を発表。
- 1923 (43) ベルリンのローボルト社、ムージルの出版社になる。ポツダムのミュラー社、『グリージャ』を六色銅版画入りで発行。4月29日、ブラハ新聞に詩『イシスとオシリス』発表。5月、「別の状態」との関連で、ルートヴィヒ・クラージェスの「宇宙的爱について」を読んで抜粋。アルフレート・デープリンの提案にもとづき『夢想家たち』にクライスト賞。11月、ベルリンのローボルト社から手刷り版で小説『ポルトガルの女』(Die Portu-

- giesin) を200部限定出版。ホーフマンスタールを議長とする「オーストリアにおけるドイツ語作家の保護協会」の副議長になる(1928年2月まで)。12月、ベルリンの「トゥルッペ」座で『フィンツェンツ』初演。
- 1924 (44) 1月24日、母ヘルミーネ死去。2月頃、『グリージャ』、『ポルトガルの女』、『トンカ』の三編を収める短編集『三人の女』(Drei Frauen)、ベルリンのローボルト社から発刊。5月、ウィーン市の芸術賞受賞。ローボルト社から喜劇『フィンツェンツ』(Vinzenz und die Freundin bedeutender Männer) 刊行。10月1日、父アルフレート死去。母ヘルミーネの場合と同様に遺骨は撒かれる。11月リルケ宛に、春には刊行される予定の小説の仕事をしていると手紙。
- 1925 (45) 小説の仕事のために、ローボルト社から前払い金を支払われるようになる(月々250ライヒスマルク)。MoEの前々身に当たる『救世主』がさらに前身の『双子の妹』の段階へ移り、これにかかりきり、発表するエッセイ、批評、短編などの数激減。4月、ウィーンの「ディ・ビューネ」誌とプラハ新聞に、「私は小説『双子の妹』を執筆中だが、この秋にはベルリンのローボルト社から発表されるだろう」と公表するが、12月には「小説は予定の期日には完成しなかった……ローボルトは来年春まで延期を認め、仕送りを続けることを約束した」と手紙に書いている。しかし10月以降ローボルトからの仕送りのないのを嘆く。
- 1926 (46) 4月、「ディ・リテラーリッシュ・ヴェルト」紙上に、上記の『双子の妹』(Die Zwillingsschwester)の概要を発表。この表題は、のちの『特性のない男』の第2巻から登場するアガータを示唆するものであるが、もちろん第1巻の内容である「平行運動」についても語られる。ベルリンに移り1927年まで滞在。胆のうの手術を受け、以後治療のために各地の保養所に滞留することが多くなる。
- 1927 (47) 1月、ベルリンのルネッサンス劇場におけるリルケの記念式典で講演。この講演はローボルトより小冊子の形で出版される(Rede zur Rilke-Feier)。12月、マルタの手紙に、『特性のない男』という小説の表題が初めて姿を現わす。
- 1928 (48) 「デア・ターク」紙に、「カカニア。一断章」と題して、やが

てMoEの第1巻第8章となるべきものが掲載される。8月、ムージルはプラハの「ボヘミア・ドイツ新聞」に、「小説は1929年春に二巻本で出版されるだろう」と予告する。

- 1929 (49) 仕事の行き詰まりのために、精神病医アードラーの弟子フーガー・ルカーチのもとで治療を受ける。1月、MoEの初章を新たに書き改める。一卷本の『双子の妹』の段階から二巻本の『特性のない男』へと移るための困難な仕事に直面して、精神的な抑圧にひどく悩まされる。4月3日、戯曲『夢想家たち』のムージル生前ただ一度の上演がベルリンでおこなわれるが、作者の抗議にもかかわらず三分の一に短縮されての上演のためもあり甚だしく不評判。4月13日、ウィーン・アルゲマイネ新聞が予告する　ムージルは「二巻本の小説を完成し、『特性のない男』という表題で秋にはエルンスト・ローボルト社から発表されるだろう」。晩秋にゲルハルト・ハウプトマン賞を受けるが賞金の来る当てはない。
- 1930 (50) 甚だしく困窮する。1月、日記に「われわれは数週間しか暮らせる当てがない」と記す。すでにMoEの第1巻の大半の校正刷りが出ているが、まだ115章以下は出していない。2月10日に校正刷りの第61章を2章に分けて61、62章にしていささか拡大する。「この仕事は非常に手間がかかるが、ウルリヒの問題はこれで第1巻の終結部の方向転換を除けば、ほとんど仕上がるであろうから、小説にとっては非常に重要である」と日記に記す。6月の手紙では、なお終結部の仕事に携わっていることが告げられている。8月26日、ついに第1巻を完成。10月、ベルリンのローボルトより『特性のない男、第1巻』(Der Mann ohne Eigenschaften, Erstes Buch)が発刊される。この反響絶大。新聞、雑誌に批評あいついで起こる。
- 1931 (51) 1月、ローボルトはMoEの発行部数5200のうち2783部売れたと作者に告げる。小説の大評判は作者ムージルが静かに暮らし創作を続けているウィーンにも及び、当地のペンクラブは3月23日にムージルのために遅ればせの生誕50年を祝う夕べを催す。9月にローボルト、今後6か月間支払いをすると約束する。11月、経済的によい職を見つけるためとローボルトの近くに住んでMoEの第2巻を完成するためにベルリンへ移る。

- 1932 (52) ベルリン在の美術史家クルト・グラザー博士発起人となり、有志を集めて「ムージル協会」を設立し経済的援助を始める。12月、『特性のない男』の第2巻第3部の前半部（第1章～38章）ローボルトから刊行される。ムージルとしては第2巻全部を完成後発表したかったのであるが、ローボルトのたつての願いを入れて渋々の刊行。
- 1933 (53) ゲーテの「詩と真実」を読む。2月、ドイツ国会議事堂放火事件、3月、ヒトラーの独裁権掌握。もはやローボルト社からの支援なし。5月ベルリンを去り、「なんら外的な圧迫はなかったが、第三帝国成立後ドイツに背を向けてウィーンへ帰り、彼の主著のためすべてを犠牲にして生活する」。11月、ベルリンの「ムージル協会」解散。
- 1934 (54) 3月、ベルリンの「ムージル協会」の会員だったクラウス・ピンクス宛の手紙に、「第2巻全巻（つまり出版されたいいわゆる第2巻+その終結部）は、第1巻と大体同じくらいの長さで約1300頁。今度こそ見込みがたつたと思われ、1年間で仕上げよう決心することができると思う」。5月、「偉大な小説『特性のない男』の完成を保証するために、差し当たり1年間ムージルの経済を後援する」ウィーンの「ローベルト・ムージル基金」設立。12月、「オーストリアにおけるドイツ語作家の保護協会」の存続20年を記念して「この時代の詩人」と題して講演。
- 1935 (55) 集中的にトルストイの「戦争と平和」を再読。6月、F・ブライへの手紙に、小説は「時どき終わりへの展望を与えてくれる」と書く。6月、パリでの「文化擁護のための国際作家会議」で講演。10月のF・ブライ宛の手紙で、「MoEは残念ながらも少しも終わる気配がない」と書く。12月、チューリヒのフマニタス社から『生前の遺書』(Nachlaß zu Lebzeiten) 刊行。
- 1936 (56) 2月、ローボルトへの手紙に、MoEの最終巻の刊行は来年の年初めには可能だろう、と書く。5月、1938年に原稿が組版にまわされることになる20の章のうちの第49章に当たるもの、「フォン・シュトゥム將軍が爆弾を投下すること。世界平和会議」を雑誌「ダス・ジルバーボート」に発表。6月、ディアナバードのプールで遊泳中に卒中発作、友人に引き上げられなければ

- 溺死したほどであったといわれている。これが原因で死にいたるまで生来の活気が失われる。
- 1937 (57) 3月、「オーストリア美術工芸クラブ」で『愚かさについて』(Über die Dummheit)と題して講演。内容は一般論的なものだが、明らかにナチスとその手先に対する呵責のない攻撃。同年、同講演はウィーンのベルマン・フィッシャー社より刊行される。同社は、ウィーンの「ムージル基金」が5000ライヒスマルクでローボルトから版權を買い受けた『特性のない男』の第1巻を新たに出版し、第2巻の未発表部分(20の章よりなる)の原稿を組版にまわし、『特性のない男』の「第3巻」として、1938年春には発刊する予定であると広告する。11月、予告された巻の植字が始まる(1938年3月まで)。しかし印刷は校正刷りまでとなった。12月、ウィーンで400人の聴衆を前にして講演。
- 1938 (58) ウィーンのベルマン・フィッシャー社、MoEの第1巻の第8版を出す(8000部)。1、2月に、上記の校正刷りのうちの第48章『白昼の月光』を雑誌「尺度と価値」に掲載。MoEに関するもので生前のムージルが最後に発表したもの。3月、オーストリアはナチス・ドイツに編入され、ドイツ軍はウィーンに侵入。フィッシャー社の人たちはストックホルムに逃れ、結局「第3巻」の出版はできなくなる。ハンブルクの出版業者オイゲン・クラスン、第三帝国内でのムージルの作品の出版を好条件で申し出るが、断わる(しかし交渉は1939年5月頃まで続くが、結局実らず)。8月、ムージル夫妻はMoEの継続のための原稿と400ライヒスマルクをもって、保養旅行の名目でイタリアに赴き、9月にスイスに入り、この国で居住の可能性を見出そうとする。夫妻が投宿したチューリヒの宿フォルトゥーナは、亡命中のジェームス・ジョイスが晩年を過ごした宿の隣りであったという。亡命中のオーストリア人の彫刻家フリッツ・ボトゥルーバと親しくなる。スイス人牧師ローベルト・ルジュヌ、活動的なアメリカ人ヘンリー・ハル・チャーチ夫妻のお蔭で、スイスでのムージル夫妻の滞在が可能になる。この頃より、アメリカ合衆国への入国のためにあれこれ努力する。
- 1939 (59) 1月、ジュネーブで朗読会。この朗読会を催した「亡命知識人

の就職斡旋のための国際委員会」は、ムージルに月100スイス・フランを約束する。ロンドンのペン・クラブの援助でイギリスへ行こうと努力する（同年11月まで）。6月、トーマス・マンはアーノルド・ツヴァイクなどと連名でロンドンのペン・クラブに書簡を送り、ムージルを「その死後の名声を私が確信する唯一無二の現存ドイツ作家」と推奨しノーベル賞候補に推す。6、7月にF・ボトゥルーバ、ムージルの胸像を制作。7月、ジュネーブの宿へ移る。9月、英米の対独宣戦。10月初旬、ジュネーブ郊外の、美しい庭のある借家に移る。11月、エルンスト・カッシーラーの「デカルト」を読む。金の窮乏はチューリヒの牧師ルジュヌなどの個人的な援助とジュネーブの救済委員会からの送金などでかつがつしのばれる。亡命中の仕事は、『特性のない男』の未発表のまま持ってきた校正用ゲラ刷りに手を加えながら、さらに先へと続けるものだった。この仕事は「むずかしいトラバースをするときのような注意力」を要し、常に障壁にぶつかっているような抵抗を感じていた。

- 1940 (60) 1月、ゲーテの「詩と真実」再読。J・ブルクハルトの「世界的考察」を読む。1月29日、チューリヒ近郊のヴィンタートゥアで招聘を受けて自作朗読。聴講者はわずか15人。ジュネーブの牧師ケラーが後援運動を起こすが、ムージルはほとんどスイスでは無名に近い作家であるため運動は沙汰止みとなる。大晦日の手紙に、「私どもは凍っています。そしてそのうえ悩み多しです……仕事はなかなか進みません——流れに逆らい1センチずつ前進する遊泳者のようです」。
- 1941 (61) 4月1日、借家事情で別の借家へ引っ越す。孤独の影さらに増す。5月、死の予感。6月ごろより、MoEの完成のためにロックフェラー財団の給費を得るために苦勞し、アメリカ在のアインシュタイン博士などの推薦を受けるが、はかばかしい結果はえられず、12月8日のアメリカの対日宣戦、独伊の対米宣戦のため沙汰止みとなる。10月17日、亡命詩人アルトゥール・ホリッチャーの死を悼み、ジュネーブの墓前で弔辞。
- 1942 (62) 1月10日、クラウス・ピンクスへ手紙して、MoEは「まだなかなか終わらない」。4月(?)12日にヘンリー・ハル・チャーチ宛の手紙の下書きに、「2、3週間のうちに、MoEの

最終巻の前半部の清書にとりかかることができ、作品の安全のためにも原稿のコピーをそちらに送るつもりだ」と書く。4月15日朝、いつものように庭の東屋で彼の草稿を前にして座っていた。9時20分ごろ薄緑色の帳面に記入し、11時ごろには医者か1日分として彼に許していた7、8本の煙草のうちの最初の2本を吸う。正午浴室で服を脱ぐ際に脳卒中に見舞われ、突然死は訪れた。最後の時間に書いていた章は第52章の「夏の日の息吹」であった。4月17日、ジュネーブの火葬場で牧師ルジュヌは追悼の辞を述べ、つづいて亡命中の若いドイツ詩人ハラルド・バルシュケが弔辞。参列者8名。未亡人マルタはその後娘のいるアメリカへ旅立つためにジュネーブを去るとき、ジュネーブの南東サレーヴ地区の森に、ムージルの父母の場合と同様にローベルトの遺骨を撒く。4月22日、フランクフルト新聞ムージルの死を告げる。

- 1943 未亡人マルタの手で、スイスのローザンヌから予約出版で『特性のない男』の未発表部分の一部が発表される。『第3巻』と名づけられ、40章460頁。
- 1949 未亡人マルタ、ローマの息子のもとで死去、享年75歳。彼女は死ぬまで夫の全作品を出版するために奔走する。ムージルの遺稿はこのローマの彼女の息子のもとに残される。イギリスの「ロンドンタイムズ」紙が、ムージルのMoEに関する戦後初めての特載を載せる。
- 1952 ムージルの死後10年、彼の未完の大作MoEはアドルフ・フリゼーの編集により、ハンブルクのローボルト社から発表される。1930年発表の「第1巻」と33年の「第2巻」と、遺稿を編集したものとの合本である。
- 1953 英訳『特性のない男』(The man without Qualities)の第1分冊が出、54年に第2分冊が、60年には第3分冊が出る。遺稿を扱う第4分冊は訳者の逝去のためもあってか予告のみに終わっている。
- 1955 フリゼー編集によりローボルト社から、ムージルの「日記、アホリズム、エッセイ、講演」(Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden) が出版される。
- 1957 これに続く巻として、ムージルの「散文、戯曲、後期書簡」

- (Prosa, Dramen, Späte Briefen) の出版。仏訳『特性のない男』(L'homme sans qualités) が翌年にかけて4巻本で刊行される。伊訳『特性のない男』(L'uomo senza qualità) の1巻目出る。『特性のない男』の英訳者のひとりE・カイザーは「メルクール」紙上で、フリーゼの『特性のない男』の遺稿部分の編集にある矛盾を指摘する。
- 1960 『特性のない男』の第3版の後書きで、フリーゼはこれに答え、自分の編集はマルタ未亡人の意を体したものであり、「最終的なものではない」と書く。ムージルの生誕地クラゲンフルトに、K・ディンクラゲ氏によりムージル文庫(Musil-Archiv)が開設される。
- 1961 スウェーデン語訳の『特性のない男』(Mannen utan egenskaper) の1巻目刊行され、63年に2巻目刊行される。
- 1962 英訳者カイザー夫妻は『ローベルト・ムージル。作品入門』(Robert Musil. Eine Einführung in das Werk) を著わし、1930、33年の『特性のない男』の第1、第2巻を手掛かりにして、1957年に唱えた彼らの主張を裏づけるべく試みる。伊訳『特性のない男』の遺稿部分を収める4巻目が刊行され、その編集は英訳者が担当している。スロヴェニア語訳の『特性のない男』(Mož brez posebnosti) の1巻目が出され、63年に2巻目が出される。
- 1963 W・ペルクハーン、「デア・ノイエ・ルントschau」誌上で上記夫妻の著書に反論。こうしてフリーゼの遺稿部分の編集をめぐって大論争が持ち上がる。
- 1964 3月、ヴィルヘルム・パウジンガーは、ローマにある遺稿をつぶさに調査し、フリーゼ編集の杜撰さを歴史的に実証的に批判する論文をローボルトから発表し、遺稿を取り扱う新しい編集方法を提案する。
- 1967 クロアチア語訳『特性のない男』(Čovjek bez svojstave) の2巻本が出される。
- 1970 ムージルの生誕90年、フリーゼ編集による『特性のない男』の「特別版」が出され、発行部数5万。オーストリア政府、ローマにある遺稿を相続人から買い受ける。遺稿はウィーンの国立図書館に収められる(1973年)。ザールブルュッケン大学に口

- ーベルト・ムージルの研究所が開設され、同所に「国際ローベルト・ムージル協会」が設立される。
- 1976 ローボルト社から、フリゼー編集でムージルの「日記」(Tagebücher) が註の1巻を加えて2巻本で刊行される。
- 1978 ローボルト社から、フリゼー編集の「ムージル全集 全9巻」が刊行される。『特性のない男』はその1巻から5巻までを占め、晩年の遺稿部分の取り扱い、W・パウジンガーの提案した編集方法にはほぼ従っている。
- 1980 チェコ語訳『特性のない男』(Muž bez vlastnosti) の2巻本が出る。
- 1981 ローボルト社から、フリゼー編集によりムージルの「書簡集」(Briefe, 1901—1942) が刊行される。
- 1984 ムージルの全遺稿は歴史・批判的(historisch-kritisch) 編集方法に基づき、クラーゲンフルト大学とトリアー大学間の共同作業で、パソコンによる書き換えが始まる。
- 1992 4月10日、上記作業の成果として、ローボルト社から「文学的遺稿」(Der literarische Nachlaß) が1枚のCD-ROMの形で発売される。

付記——このローベルト・ムージル年譜は、MoEと関係の深い事項に重心をかけたものであり、たとえばムージルのエッセイなどについてはほとんど触れられていない。作品の題名は、ムージルの文学作品のみを2重かぎかっこ(『 』)で囲んだ。なお、ムージルの年譜作りで困難なのは、その年・月・日を特定できない場合があることで、したがって推定上のものがあることをお断りしておく。

参考文献

Robert Musil, Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden. Hrsg. v. A. Frise. Hambug 1955

Robert Musil, Späte Briefe. In: Prosa, Dramen, späte Briefe. Hrsg. v. A. Frise. Hamburg 1957

Karl Dinklage, Musils Herkunft und Lebensgeschichte. In:
Robert Musil, Leben, Werk, Wirkung. Hrsg. v. K. Dinklage.
Wien 1960

Ernst Kaiser / Eithne Wilkins, Robert Musil. Einführung in
das Werk. Stuttgart 1962

L'uomo senza qualita, volume terzo. A cura di Eithne Wilkins
e Ernst Kaiser, introduzione di Cesare Cases, traduzione di
Anita Rho. Torino 1962

Jürgen Thömig, Robert-Musil-Bibliographie. Bad Homburg v.
d. H 1968

Dietmar Goltschnigg, Mystische Tradition: im Roman Robert
Musils. Heidelberg 1974

Robert Musil, Tagebücher. Hrsg. von A. Frise. Hamburg 1976

Helmut Arntzen, Musil-Kommentar, zum Roman "Der Mann
ohne Eigenschaften". München 1982

Karl Corino, Robert Musil, Leben und Werk in Bildern und
Texten. Hamburg 1988

Ludvík E. Václavěk, Robert Musil, in Tschechoslowakische
Sicht. In: Musil-Forum, wissenschaftliches Beiheft. Saar-
brücken 1990

20 Jahre Arbeitsstelle für Robert Musil Forschung an der
Universität des Saarlands, 1970—1990 Saabrücken 1990

— 1992年11月11日

加藤 二郎